

古賀道子*、○田頭睦美**、高橋和雄*

(*和洋女大 文家政、**三島学園女短大)

序論 これまで被服製作の指導方法と機材のコンピュータ化に関して、製作を通して検討してきた¹⁻⁴⁾。今回は、JISサイズを基に実寸原型を作成して部位間の距離を求め、方式による差異と問題点を検討した。また、肩の傾斜と前屈度の計測装置を試作し、相関関係を調べた。

方法と結果 婦人原型を身体参考寸法⁵⁾のJISサイズ5AR,9AR,13AR,17ARに対して製図した。ただし、ドレメ式では乳下がり寸法が示されていないので、乳頭下がり寸法を用いた。図から求めた乳下がり寸法は、5ARで16.5、9ARで17.4、13ARで19.5、17ARで20.4cmとなった。また、各部位間の寸法の差(文化式-ドレメ式)は、5ARと9AR、13ARと17ARとで同じような値を示している。その中で5ARと9ARの胸幅、前肩幅、前首回り、前袖ぐりで、また13ARと17ARの前袖ぐり、13ARの前首回りでそれぞれ負となっている。また、文化式の袖ぐりは、後ろの方が約0.5~1cm長く、ドレメ式は前の方が4.0~5.0cm長い。文化式の方では肩甲骨の動きを考えると後ろが多少長くても問題はないが、ドレメ式の方はSPの位置が後にずれ、腕を前方に動かしにくくなる。さらに、ドレメ式の肩幅は前後とも同寸であるが、これでは肩甲骨のいせこみ分がないので、運動機能性のためには後肩幅に数cm足す必要がある。

肩の傾斜角と前屈角の測定装置は、パソコンラックの横幅を70cmに拡げ、水平板を胸部が入るようくり貫き、板上に定規とノギスからなる計測ユニットをのせたものである。測定値を左右別々に散布図にしたが、一定の傾向は認められず、相関係数も低かった。ただし、成長期に水泳をしていた被験者では右の前屈量が極めて少なく、また左右の相違も顕著であった。

参考 1~4) 高橋ら;家政学会 第44~47回大会要旨集. 5) 中里ら;服飾造形 I, p.19, 東京家政大学出版.